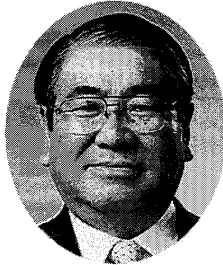


新会長あいさつ

会長就任にあたって

—社会繁栄へ貢献する品質管理を目指して—



(株)日立製作所 代表執行役 執行役副社長
大沼 邦彦

サブプライムローン問題に端を発した金融危機は、各国の実体経済へ悪影響を及ぼしはじめ、先進国から発展途上国まで世界中に大きな問題を引き起こし、百年に一度と言われる深刻な経済問題に発展している。また、世界は地球温暖化や自然災害対応などの大きな課題も抱えており、このため世界の安定化、繁栄化に向けた地球規模での継続的な取り組みが重要な課題となっている。

一方で人の行為に起因する不正行為や製品不具合など諸々の事件・事故も多発しており、安全・安心を含めた社会生活における信頼性の回復や質の向上は大きな課題となっている。

このような情勢を踏まえて政府は「豊かで安心して暮らせる国民社会」のための「持続可能な経済システム」に向けた政策検討を進めている。ここで活力ある経済は、豊かな国民生活の原資であることを認識する必要があり、社会繁栄のために産官学が協力して取り組むべき課題である。

その意味で本学会の「Q-Japan 構想」による国際競争力向上を狙った「品質立国—日本の再生」の取り組みは社会繁栄への大きな貢献活動と考えている。08年11月の会長講演で述べたように、第二期の中期計画は、第一期中期計画の4本柱(Qの確保・展開・創造、共通)を継承し、また安全・安心で繁栄する社会の構築に向けた産官学の取り組み課題や学会員のニーズに沿って策定したものである。そして、本年度はこの第二期中期計画の初年度に当たり、またANQ国際会議の東京大会などの大きなイベントもあるため、4本柱の各テーマがスムーズに立上り、力強く展開していくように関係各位にお願いしたい。以下に本年度の主な施策についての要望

を述べたい。

まず、「Qの確保」では学の知見を産で大いに活用して企業品質の向上・競争力強化を図るべく産学連携の推進と拡大をお願いしたい。本年度は4件の新テーマの取り組みが始まるが、さらに多くの業種での事例を積み重ねて「知の実践」の蓄積を学会としての資産としていきたい。

「Qの展開」では、従来のモノづくり分野から新しい医療分野での展開が着実に進んでおり関係者の努力に感謝したい。さらに原子力の安全管理などインフラ分野へも取り組み始めているが、これを力強い活動にし、「専門家団体」として社会インフラの信頼性・安全性の向上に貢献していきたい。

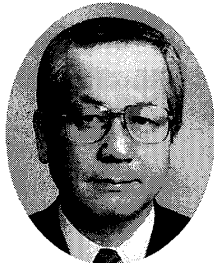
「Qの創造」では、サービス分野の顧客価値創造に加え、次世代の核となる革新的な品質管理の理論や技術・手法の開発への挑戦もお願いしたい。日科技連との「次世代TQM構築プロジェクト」など、新しい品質管理技術への挑戦は学会の明日を作る「DNA」でありたい。

「共通」では、まずは学会員の減少傾向への対策である。力強い学会活動のためには会員の「質と量の充実」が必須であり、是非QC検定の受験者の増加を品質管理層の強化と学会員の拡充へ繋げていきたい。次に、公益法人法改正への対応である。これも学会として重要な案件であり、検討委員会を発足させ、学会としてベストな対応をしていく所存である。さらに、上述した第7回ANQ国際会議の開催である。これを成功させるべく会員の積極的な「参画」をお願いしたい。

最後に、社会繁栄への貢献が学会の発展に繋がると信じており会員各位と「協働」していきたい。

前会長あいさつ

会長退任にあたって



東京工業大学 教授
圓川 隆夫

36期、37期と2年間会長を務めさせていただいた。何とか大沼新会長にバトンタッチできたのは、鈴木庶務担当理事や、強烈なリーダーシップで中期計画を担当していただいた永原理事をはじめ理事会の方々、そして事務局に支えられてのことである。この場をお借りして深くお礼申し上げたい。そして何より大きかったのが中期計画の存在である。やるべきことの方向性が明確にできしかもブレない、かつ理事の方々とそれを共有できた。

中期計画の4本柱の中の一つ「Qの確保」の目玉の施策であった新しい形態での産学協同プロジェクトは、日本科学技術連盟の浜中理事長の尽力により「次世代TQM」プロジェクトとの連携もあり、準備中まで含めれば7プロジェクトまで拡大させることができた。是非さらなる拡大を期待したい。また、当学会は他学会に比べて日本科学技術連盟、日本規格協会から様々な支援にいただいているという有利な立場にある。今後も品質立国を支えシナジー効果を引き出す連携のあり方を、三者間の確認書という形で文書化することも行った。

また、品質の啓蒙と学会のパブリシティを高めるためのJSQC選書は、2008年9月に第一弾4冊が刊行され、引き続き半年ごとに第二、三弾と刊行される予定である。『新版品質保証ガイドブック』の刊行は、実に35年ぶりの学会員総力を挙げての事業であり、2009年秋への刊行に向けて順調に編集作業が進んでいる。

ひとつ気がかりなことは、会員数の微減傾向に歯止めがかかっていないことである。幸いQC検定の受験者が、年間5万人を超える勢いになっている。そ

の中の1級、2級合格者は、将来学会員になっていただく有望な予備軍と考えられる。実際の入会に結実させるためには、第2期に入った中期計画を確実に実現し、学会をさらに魅力的なものすることが、最も重要で本質的なことではないかと思われる。

私が会長を務めた2年間で、高品質・高信頼性として世界同一水準を目指したわが国品質に関連した新たな課題も実感した。例えば、一つはガラパゴス化と呼ばれていることであり、わが国以外の世界では“そこそこ”の品質や機能で低価格の製品がスタンダード化するという現象である。もう一つは、私の勝手な造語であるが品質ホメオスタシスとも呼ぶべきもので、故障しない製品に慣れた消費者・使用者が、適切なメンテナンスなしで長期間製品を使用し続け、思わぬ事故が発生するという現象である。

無論、安全とか環境に関する部分は、引き続き不良ゼロ、故障ゼロ、環境負荷ゼロを追求すべきである。しかしながら、一方で、ガラパゴス化については、グローバルな市場特性を見据えた経営戦略との関係で品質や機能を考える。品質ホメオスタシスについては、品質に関する消費者や使用者とのリスクコミュニケーションという新たな経済文化を醸成していく、というような必要性が出てきたのではないかと思われる。

会長を辞しても、中期計画の実施項目や学術会議との関連で、まだいくつかのやるべき任務を抱えている。今後も1会員の立場で、中期計画実現に尽力させていただくことを通して、わが国品質管理のさらなる発展に少しでも貢献できたらと思う次第である。